

読譜力を高める指導法の工夫
 — 第3学年の「音楽づくり」を通して —

神栖市立太田小学校
 教諭 幡 明枝

目次

研究概要		
1 主題設定の理由	-----	1
2 研究のねらい	-----	2
3 研究の仮説	-----	2
4 研究の内容	-----	2
(1) 基本的な考え方	-----	2
① 読譜力とは		
② 楽譜とは		
③ 読譜力を身につけるために		
④ 読譜指導の段階		
⑤ 第3学年で「音楽づくり」を通して読譜力を高める有用性		
⑥ 「音楽づくり」とは		
(2) 研究を進めるにあたって	-----	4
① 五線譜（音符や休符）に親しむために		
② 拍子感覚をつかむために		
(3) 検証事項	-----	6
5 実践例	-----	6
6 授業実践の様子	-----	7
7 児童の実態調査結果と考察	-----	8
(1) 児童の実態調査時期	-----	8
(2) 調査方法	-----	8
(3) 調査の結果と考察	-----	8
8 研究の成果と今後の課題	-----	10
(1) 研究の成果	-----	10
(2) 今後の課題	-----	11
【引用・参考文献】	-----	12

研究概要

本研究は、これまで取り組んできた自分の読譜指導が、子どもの中で確かなものになっていないのではないかと、という反省のもとに取り組んだものである。「読譜を身につける学習」を常時活動として取り入れた上で、「音楽づくり」の活動を行う。そうすることで、すべての子どもが同じ学びのステージに立って意欲的に音楽活動に取り組み、「読譜」の必要性を感じ、「読譜力」の向上が図れると考えた。このことを、実践を通して検証したいと考え、研究主題を「読譜力を高める指導法の工夫」－ 第3学年の「音楽づくり」を通して －と設定した。研究のねらいは、「第3学年の『音楽づくり』を通して、読譜力を高める指導の工夫について追求する。」ことである。

研究の仮説として「(1) 第3学年において、楽譜についての知識を段階的に取り入れることで、五線譜や音符・休符、リズム、拍子を身に付けることができるであろう。」「(2) 教師がリズムづくりやふしづくりなどの「音楽づくり」の場を設定すれば、楽譜の有用性を感じ、より読譜力を高めることができるであろう。」を立てた。

本研究では、「学習論」にもとづいた読譜力を身につけるための記憶や読譜指導の段階などを知り、学習指導要領に記述されている内容、[共通事項]イの教科書初出学年を整理し、再認識した上で研究を行った。そして、読譜の3つの段階を「読譜の『種』『芽』『花』」と名付け、本研究の対象学年である第3学年の読譜の段階（初期段階）の「読譜の種」の中の五線の音符や休符、リズム、拍子を中心に「『読譜の種』を常時活動に意図的計画的に取り入れる。」と「お囃子の旋律づくりを設定し、ペアやグループでの音を介した話合い活動や練り上げを行うことにより、『基礎的な能力』である、楽譜についての知識の有用性を感じさせる。」の2つの活動を実践し、検証した。授業実践後、児童の変容を分析すると、以下の成果と課題を得たといえる。

研究の成果としては、「『読譜の種（リズム・五線譜・拍子）』に関わる活動を長期的計画のもとに取り入れることにより、各自が自信をもって『音楽づくり』に取り組むことができた。」「『音やリズムの限定』をしたお囃子の旋律づくりは、音を介した話合い活動や練り上げを行うことにより、今後の『音楽づくり』への意欲につながった。」「本研究により、五線譜に慣れ、以前より読譜力が高まった。また、『音楽づくり』の活動を通して、リコーダーの技能も向上した。」があげられる。今後の課題としては、作品の発表の場の設定と共有化、より多くの読譜の種に関わる活動案の考案の必要性を感じた。

音楽科の授業時間数が少ない中「音楽づくり」を行うには、それまでの音楽活動がどれだけ児童に身につけているかが問われるとともに、その活動が次の活動につながる力とならなければならない。教師自身が真剣に子どもたちに「読譜力」を身に付けることに向き合い、日々の授業に取り組み、「活動あって学びなし。」という状況に陥らないようにしなければならないと感じた。この実践の反省のもとに、今後も音の面白さ、特徴に気付かせると共に、「読譜の芽・花」である、「楽譜から音を読み取ったり演奏したりして旋律に組み立てていく力」「旋律をつなげて音楽にしていく力」「『リズム』『歌詞』『旋律』と段階的に音楽を組み立てる力」を身に付けられる取り組みを、発達段階や楽曲の楽曲の特徴に応じて、意図的に仕掛けていきたい。なお、本研究を一般化し、誰もが段階的に実施できるような方法論を確立するのも、今後の課題である。

研究主題

読譜力を高める指導法の工夫

－ 第3学年の「音楽づくり」を通して －

神栖市立太田小学校 教諭 幡 明枝

1 主題設定の理由

音楽活動において、読譜力は、あらゆる表現活動を行う上で基礎となる能力である。楽譜がわからなくても音楽活動はそれなりに楽しめる。しかし、読譜力について、次のような調査結果がある。

資料1 表1 最近(過去2年間ほど)の子どもの音楽の力について (%)

資料1は、最近の小中学生の「聴く力」と「読譜力」の実態を音楽担当教師がどのように捉えているかを調査したものである。調査結果では最近の子どもの音楽の力について、ほとんどの項目において「やや不足」と感じている教師が多いことがわかる(杉江:2009,7)。なかでも「⑥楽譜を読む力」については、ほぼ全員の教師が「大変不足」「やや不足」と、感じている。そして、10年以上前の子どもと比べると「低下した」と、半数の教師が感じている。

2006年9月全国8県を対象に実施

小学校	最近の子ども			10年以上前の子どもと比べて		
	大変不足	やや不足	十分	低下した	変わらない	向上した
1 全体的な音楽の力	4.0	77.5	18.6	26.6	59.9	13.5
2 リズム感	4.5	58.9	36.6	15.7	59.8	24.5
3 音楽に身体で反応する力	11.4	57.8	30.8	21.4	58.3	20.3
4 歌声の質	12.8	65.4	21.9	27.6	57.6	14.8
5 歌のレパートリー	20.4	61.2	18.4	48.2	37.3	14.5
⑥ 楽譜を読む力	43.1	51.1	5.7	39.8	53.0	7.2
7 音楽を耳で聞いて模倣する力	10.6	56.5	32.9	14.2	69.7	16.1
8 音楽に取り組み意欲	2.5	52.6	44.9	20.0	69.9	10.1
中学校	大変不足	やや不足	十分	低下した	変わらない	向上した
⑥ 楽譜を読む力	58.1	39.9	2.1	52.8	42.9	4.3

※1 「10年以上前の子どもと比べてどのような変化が見られるか」については、在職年数10年以上の教師に回答を求めた

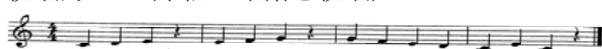
※2 網掛けは、8項目の中で高い比率の数値

この「楽譜を読む力」については、小学校学習指導要領解説の音楽編に「音楽活動の基礎的な能力を培う」に関連する内容として、読譜や

資料2 【音符・休符・記号・和音記号等に関する理解度調査】
某附属中学校1年入学者(ピアノ教室等での既学習者60%)対象
本校3学年調査結果(赤字)で表示

[共通事項]が示されている(別途資料1)(文部科学省:2008)。それに対して、資料2は、子どもの実態はどのような状況にあるのか、中学校1年生を調査した結果である(吉富・三村

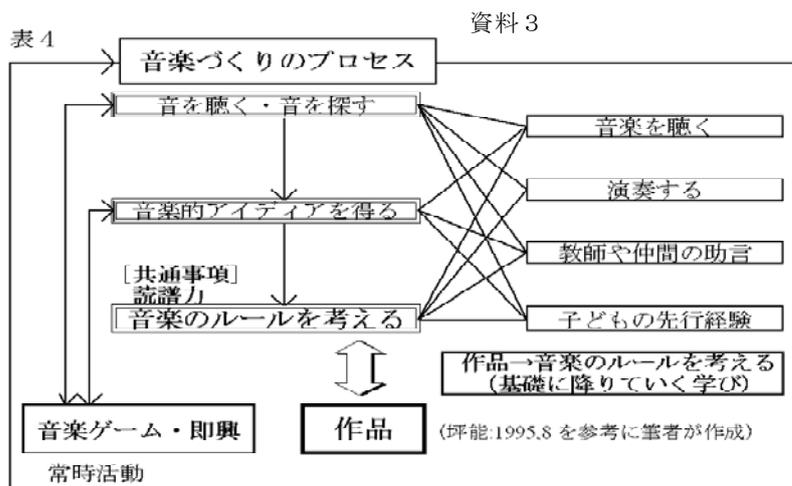
- ・ 8分休符 47%, 4分休符 54% (12%), 縦線 12%, 終止線 18%
- ・ 強弱 70% p(14%) 拍子記号 50% (「4分の4秒子」等の誤答多し)
- ・ 拍子記号の意味 20%, 速度記号 (♩ = 120) 皆無
- ・ 和音記号 (I・IV・V) 30%
- ・ 視唱力 10% (下記の楽譜を視唱)



:2008,155 吉富:2010,1)。この調査では、ピアノ教室等での既学習者が60%の中学校1年生を対象としているにもかかわらず、音楽に示された重要な学力の1つの側面である、音符、休符、記号、和音記号等の理解がほとんどできていないことがわかる。つまり、楽譜に関する知識の蓄えは、小学校の音楽教育を通して十分になされていないのである。音楽科における歌唱や器楽、音楽づくり(創作)などの表現活動には、読譜や記譜の能力は欠かすことができないにも関わらず、私たち教師が「読譜力」を高める指導を十分になしていたかは疑問である。実際、本校3学年で理解度調査を実施したところ、既習事項である4部休符ですら、正答率は12%にしか至らなかった。この実態は、市川が述べた「あらためて基礎基本の大切さを実感し、習得サイクルに戻ってくるという『基礎に降りていく学び』がもっと学校教育の中に取り入れられても良い。」(市川:2008,13)という考えをしっかりと授業に取り入れていないこ

とを示している。すなわち、資料3の矢印  で記す所の活動量の不足を指しているのである。

このことを受け、小学校3年生で「読譜を身につける学習」を常時活動として取り入れた上で、「音楽づくり」の活動を行う。そうすることで、すべての子どもが同じ学びのステージに立って意欲的に音楽活動に取り組み、「読譜」の必要性を感じることができる。そして、その読譜力が高めることができるか、実践を通して検証したいと考え、この主題を設定した。



2 研究のねらい

第3学年の「音楽づくり」を通して、読譜力を高める指導の工夫について追求する。

3 研究の仮説

- (1) 第3学年において、楽譜についての知識を段階的に取り入れることで、五線譜や音符・休符、リズム、拍子を身に付けることができるであろう。
- (2) 教師がリズムづくりやふしづくりなどの「音楽づくり」の場を設定すれば、楽譜の有用性を感じ、より読譜力を高めることができるであろう。

4 研究の内容

(1) 基本的な考え方

① 読譜力とは

山田は次のように述べている。「読譜とは、広義では視唱(奏)と同義である。すなわち音楽辞典にあるように、リズムも音程も、場合によってはハーモニーもつけて歌ったり演奏したりすること、いいかえれば、楽譜に書いているものを音楽として表現することとなる。」(山田:2001, 177)さらに、読譜のための手続きとして山田のあげた考えを筆者が資料5にまとめた。ア～ウの段階をそれぞれ「読譜の『種』『芽』『花』」と筆者が名付けた。

本研究では、第3学年を対象としているので、読譜の初期段階であるア「読譜の種」に重点を置き、研究を進

める。特に「読譜の種」の中の五線の音や休符、リズム、拍子を中心に読譜力を身につけさせていきたい。

資料4【読譜の段階】

読譜の段階		内容
ア	種	楽譜についての知識の獲得
イ	芽	楽譜に内在する音楽の読み取りや理解
ウ	花	読み取った音楽を演奏するための技能の獲得

② 楽譜とは

畑中は「楽譜」の有用性や必要性は、「楽曲の設計図としての楽譜」と「記録としての楽譜」の2点であると述べている(畑中:2009, 36)。音楽教育においては読譜ができて当然と考えられている。それも西洋音楽に使用される「五線譜」に限定される。表されている情報を読み取り作曲者が意図するであろう音楽を再現できる「楽譜」が「五線譜」なのである。学校教育において教師は、この楽譜の有用性や必要性を子どもに気づかせ、便利な物として積極的に活用できるよう指導していく必要があると考える。

③ 読譜力を身につけるために

「学習論」における「記憶」について、西林は、『記銘(情報を取り込むこと)』、『保持(その情報を頭の中で保っていること)』、『検索(必要に応じてその情報を取り出すこと)』の三段階がある、そのどの段階で不備があっても、よく記憶されたことにならない。また、必然性を加える作業『精緻化』を行うことにより、記憶は飛躍的に上昇する。」と述べている(西林:1994, 19)。

このことを「読譜」に置き換えてみると、「記銘」「保持」「検索」のそれぞれの段階がスムーズに行うことができないと、読譜力が身についたとはいえない。また、つくった作品を記譜する場を設定することは、記録としての楽譜の機能を果たすので「記譜の必然性」を子どもが感じとることができると思う。

④ 読譜指導の段階

ハンガリーの小学校の教科書を参考に(尾見:2009,83)、読譜指導を単に五線譜の指導とはせずに(ア)リズム絵譜の活用、(イ)リズム譜の下にリズム唱、(ウ)メロディー譜に階名、(エ)メロディー譜とリズム絵譜、(オ)リズム譜と階名、(カ)音符のように(ア)～(カ)の段階的な指導を繰り返し活用し読譜力を身に付けさせることとした。

⑤ 第三学年で「音楽づくり」を通して読譜力を高める有用性

音楽的な発達段階の中で、低学年と高学年の狭間にある小学3年生は「模倣期」から「想像遊び期」への転換期にあたる。しかし年齢が上がったからといってすぐ次の段階へ移行するわけではなく、それぞれの段階は順を追って前段階を包括しながら発達していくと考えられる。

このことから、読譜に関わる音楽ゲーム(リズムや旋律の模倣)やイメージする音楽を即興的に表現するなどの活動は、音楽的発達段階を加味して継続的に行う必要がある。また、このようにして身につけた読譜力を生かして、「音楽づくり」を行い、つくった音楽を記譜したり、友だちの作品を楽譜から再現したりすることは、自分の「記憶」をさらに深める活動となり、より児童の読譜力が高まると考える。

⑥ 「音楽づくり」とは

新学習指導要領の音楽科改訂の趣旨「音楽づくり」に関して(文部科学省:2008)や、音楽科改訂の要点では、低学年の段階から、音楽になる前のさまざまな「音」を十分に楽しむという展開が望まれる記述がされている。それは「表現されるもの」よりも「そ

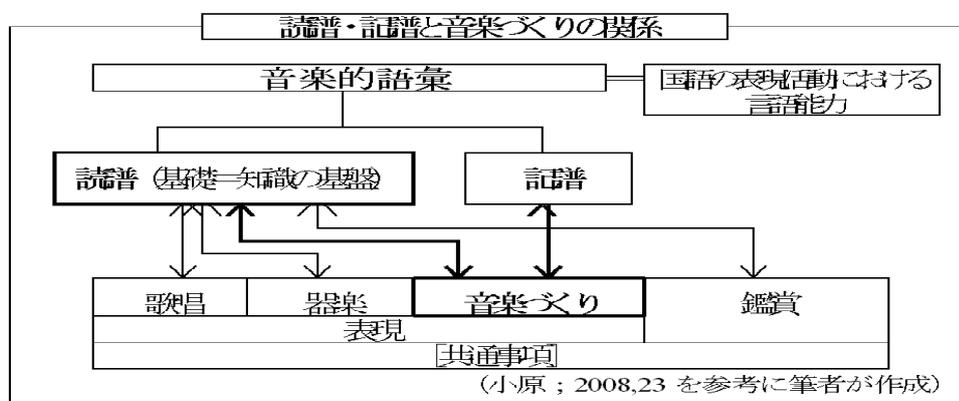
の表現に至る過程での音遊びとそれにかかわって「共通事項」をいかに学んだか」が問われているのである。また、歌唱や器楽の領域と比較した時、歌や楽器が苦手な子どもでも、「音楽づくり」では、「できる楽しさ」を味わえると考える。加えて、それらの活動を通して何度も読譜や記譜を行うため、楽譜の有用性が実感できるのである。(資料5①読譜・記譜と音楽づくりの関係)

また、筆者は中島の考え(中島:2011,64)をもとに、「音楽づくり」を取り入れる効果を、別途資料2のようにまとめた。特に、読譜力を高める可能性を期待し、本研究を行っていく。

(2) 研究を進めるにあたって

6年間でどのように教科書に「共通事項」イが取り扱われているのかをまとめた上で、意図的、計画的に「読譜の種」に親しむ活動を実践していく(資料5②)。

資料5①



(小原; 2008,23 を参考に筆者が作成)

資料5②【読譜の種に親しむ活動例】

読譜の種	活動例
ア リズム	(ア)言葉遊び (イ)即興のリズム遊び (ウ)リズム絵譜を用いたリズム遊び (エ)五線譜に音符を並べたリズム遊び
イ 五線譜	(ア)既習曲を活用したドレミに親しむ曲づくり (イ)〈ドレミの歌〉でドレミに親しむ (ウ)からだで音符(エ)お味噌汁の歌
ウ 拍子	(ア)体の動きを通して感じとる (イ)拍子によって絵本読み (ウ)お手玉の活用

いろいろな音符・休符・記号の初出の学年

(「指導書実践編 小学生の音楽」教育芸術社 を参考に筆者が作成)

学年	音符	休符	拍子	記号
2年				
3年				
4年				
5年				
6年				
覚えておくと便利な音符				

実際に本実践前に多く取り入れて、効果的だった活動を以下に示す。

① 五線譜（音符や休符）に親しむために

ア からだで音符（中島:2005,110）【読譜の種に親しむ活動例 イー（ウ）】

（ア） 資料6 ①ーアのように黒板に音符や記号カードを貼り、下に名称を書いておく。

（慣れてきたら名称を書かずにカードのみを掲示する。）

（イ） 音楽に合わせて体を動かしながら教室を自由に移動する。

（ウ） 音楽が止まったときに、教師が音符や記号の名称を大きな声で言い、それに対し子どもたちは、直ちに、言われた音符や記号の形をイメージして、それを体で表現する。（これらの活動を発展させ、強弱記号のオリジナルの動きと歌をつくり皆で活動する。）

イ お味噌汁の歌

ドミソシレの五線の位置を覚えるためのオリジナルソング（資料6 【①ーイ①②】と、取り外しができる掲示物（資料6 【①ーイ③】）を作成した。②「♪みそみそしるしるみそしる～おみそしる～」と、歌ったり、③のカードを正しく貼ったりする活動を行う。この活動で、「ドミソシレ」の位置を確実に覚え、他の音も、「ドミソシレ」を基準にして読めるようになってくると考える。

資料 6

【①ーア からだで音符】



実際の様子

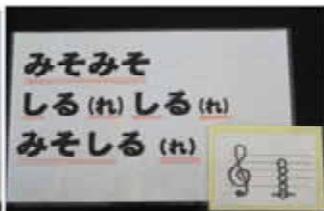


【①ーイ お味噌汁の歌】

①



②



③



【②ーイ 拍子によって絵本を読む】



♪ きょうは いよいよ マラソン たいかい
 そらまめ そろって マラソン さ
 にんきものの にんにく きんにく むきむき ~

② 拍子感覚をつかむために

ア 体の動きを通して感じとる。（取りあげる拍子→4拍子・3拍子・2拍子）

音楽に合わせて体を左右に揺らす、行進、手拍子、指揮の動作をしながら音楽を聴く。「指揮の動作」「指揮のまね」とは、指揮法に基づく本来の指揮として扱うのでは

なく、あくまで拍子や速度、強弱などを感じとるための体の動きとして取りあげることである。〈とどけよう このゆめを〉(4分の4拍子)→行進・指揮・指揮のまね
イ 拍子によって絵本を皆で読む。『おやおや、おやさい』(石津・山村:2009)

太字にアクセントをつけて、拍を意識する。絵本をプロジェクターで映し、皆で唱える。(資料6【②ーイ】)

(3) 検証事項

お雛子の旋律づくりを指導計画の最後に設定し、ペアやグループでの音を介した話合い活動や練り上げを行うことにより、「基礎的な能力」である、楽譜についての知識の有用性を感じさせていく。授業実践後、次の検証を行う(資料7)。

資料7 【検証内容】

ア 発言内容やワークシートの記述から、リズムづくりや旋律づくりを行う前に、常時活動で「読譜の種」を取り入れることは、各自が自信をもって「音楽づくり」に取り組むことにつながったか、とらえる。

イ ワークシートや感想の記述から、音やリズムの限定が、今後の「音楽づくり」への意欲につながったか、とらえる。

ウ 先に述べた活動によって、読譜力が高まったか、活動の前後で調査を実施して、とらえる。内容は、1 主題設定の理由 表3(吉富:2010,4)のうち音符記号(4分休符・p)視唱力とする。視唱に関しては、①表3と同じ旋律と②〈お味噌汁の歌〉に出てくる音のみを使った旋律、③本時で取り扱った3音のみの旋律、④3拍子の難易度の高い曲(下の4曲)で調査する。



5 実践例(途中省略 別途資料3 参照)

(1) 題材名 拍のながれにのろう(8時間取り扱い)

(2) 目標

- 拍の流れによって、拍子を感じ取りながら表現したりきいたりする。
- 拍子によって、きれいな音でリコーダーを演奏したり、自分でつくった旋律を演奏したりする。

(3) 展開(資料8)

学習内容・活動	読譜の種類	準備資料	教師の支援(○), 評価(◎)
1 既習曲を歌ったり演奏したりする。 (1) 「とどけよう このゆめを」を歌う。 (2) 4拍子の流れによって、ラ・ド・レの3つの音でドレミ遊びをする。 ・指導者による階名の範唱を聴いて階名模唱をする。 ・前時につくった3音の旋律をリレーでつなぐ。 (3) 「とどけよう このゆめを」のリコーダーパートをCDに合わせて演奏する。	拍子 (ア・イ) リズム (イ)	ア イ イ	○ 既習曲を気持ちを一つに演奏することにより、本時の学習への意欲を喚起する。 ○ ドレミ遊びを通して、音符や休符の復習をする。 ○ 本時の旋律づくりで使うリズムを既習曲で復習することで、スムーズに活動に入れるようにする。 ○ 本時の旋律づくりで使うリズムを既習曲で復習することで、スムーズに活動に入れるようにする。
2 本時の学習課題を確認する。 おはやしのせんりつをつかってえんそうしよう			

<p>3 お囃子の旋律をつくる。</p> <p>(1) 拍の流れにのり、「旋律をつくるリズム」を手拍子で打つ。</p> <p>(2) 「旋律をつくるリズム」に、ラ・$\overline{\text{下}}$・$\overline{\text{レ}}$の3音を当てはめてつくる。</p> <p>例 <table border="1" style="display: inline-table; vertical-align: middle;"> <tr> <td style="padding: 2px;">ラ</td> <td style="padding: 2px;">$\overline{\text{下}}$</td> <td style="padding: 2px;">レ</td> <td style="padding: 2px;">$\overline{\text{レ}}$</td> </tr> </table></p> <p>(3) できた旋律を階名唱する。 (4) リコーダーで演奏して確かめる。 (5) 学習カードに書き留める。 (6) 音符や休符を使って5線に書き写す。</p> <p>(7) ペアで演奏する。</p> <p>(8) お互いの楽譜を交換して演奏する。</p> <p>(9) グループでつくった旋律を順番に拍に乗ってリレー演奏する。</p>	ラ	$\overline{\text{下}}$	レ	$\overline{\text{レ}}$	$\overline{\text{レ}}$	$\overline{\text{レ}}$	$\overline{\text{レ}}$	$\overline{\text{レ}}$	<p>拍子 (ア)</p> <p>五線譜 (ア・オ) リズム (エ)</p> <p>五線譜 (エ)</p>	<p>ウ ○ リズム絵譜や五線を提示することにより、(2)～(6)の活動が抵抗なくできるようにする。</p> <p>エ ○ カタカナで書き込める学習カードを用いてリコーダーで演奏できた旋律を書き留めることにより、誰もが自分の作品をつくれるようにする。</p> <p>ア ○ 音を3音に限定することで、音楽づくりに全員で参加できるようにする。</p> <p>エ ○ 答えは一つではないことを伝える。</p> <p>○ 前時までに学習してきたリズム絵譜や五線譜を掲示することにより、記譜がしやすいようにする。</p> <p>ウエ ◎ 3つの音の組み合わせを工夫して、旋律をつくっている。(音楽表現の創意工夫) 〈観察・発言・ワークシート〉</p> <p>○ ペアで助言したり演奏し合ったりすることで、自分の作品に自信をもったり、自分の作品の参考にしたりできるようにする。</p> <p>○ 作品を交換して五線譜から再現することで、記譜の有用性を感じとらせたい。</p> <p>○ 3～4人の少人数での発表の機会を設けることにより、演奏と鑑賞のマナーを身に付けさせるとともに、互いの演奏に対する批評力と自己評価能力を養いたい。</p>
ラ	$\overline{\text{下}}$	レ	$\overline{\text{レ}}$	$\overline{\text{レ}}$	$\overline{\text{レ}}$	$\overline{\text{レ}}$	$\overline{\text{レ}}$			
<p>4 学習のまとめをする。</p> <p>(1) お囃子の雰囲気を出して楽しんで演奏する。</p> <p>・ 全員で、和太鼓や小太鼓(響き線なし)でリズム伴奏を加えて楽しむ。</p> <p>(2) 本時の活動をお天気マークに自分の名前を掲示して振り返り、適宜授業者と「おはなし」をする。</p>	<p>オカ</p> <p>キク</p>	<p>○ 旋律のリレーにリズム伴奏を加えて、お囃子を演奏させることで、拍の流れにのって演奏する楽しさを味わわせたい。</p> <p>○ 本時の活動を振り返らせ、次時の助言に生かす。</p>								

※ 前時までの常時活動で行った『「音楽の基礎的な能力」の学習＝読譜の種に親しむ活動』が、本時の活動に効果的であると予想されることを資料5-②【読譜の種に親しむ活動例】に当てはめ「読譜の種」として記す。

6 授業実践の様子

お囃子の旋律をリコーダーのラ・ $\overline{\text{下}}$ ・ $\overline{\text{レ}}$ の3音を用いてつくった。導入で取り入れた同じリズムのリコーダー曲、拍の長さに合わせたプリントを使用した旋律づくりにより、全員が自信をもって4小節の旋律を完成することができた。活動時に、「イチ、ニイ、サンハイ」と声を掛けたり、指揮をしたり、拍子をとったりしなら二人のリズムをつなげて演奏しようとする姿がみられた。音の限定が皆で活動できた理由でもあると考える。しかし、五線譜への記入はなかなか難しく、ほとんどの児童が玉のみの記入になっていた。また、棒の向きや4分休符の記入も難しかった。そこで本時は、拍の長さに合わせた短冊の用紙に各自の旋律を記入してグループ活動につなげていった。

ペアで、お互いにつくった旋律を交換して演奏し合うことは、友だちに自分の作品を演奏してもらえらることもあり、自分の作品に自信をもつことができた。

グループでつくった旋律を順番に拍に乗ってリレー演奏をする場面では、演奏の順番をどのようにするか、よりよいつなぎ方を試行錯誤していた。国語科で学んできた「グループ司

会の言葉」を用いて、スムーズに話し合い活動を行った。どの順番で演奏するか、音で試しながら確認し、変更をしていた。その際、各自の短冊の用紙に記入した作品を紙上で順番を変えながらできたのが、よりよい音楽づくりにつながったと考える。このことにより、どのグループも発表したいと挙手していた。

4人の作品をつなげて、発表し合うと、「最後とその前の順番を変えた方がいいと思います。その方が終わった感じがするからです。」とか、「どうしてそう思ったのかな？」と補助発問をすると、「終わりの音がラよりレの方が終わった感じがするからです。」などと、発言していた。実際の音を介して話し合うことは、よりよい作品にしようと音に耳を傾け、気づきを深めるのに効果的であった。

本時だけでは活動が十分ではなかったため、1時間活動を増やした。五線譜に記譜し、その旋律をグループでつなげて発表したり、できた作品を他グループと交換演奏する追加授業を行った。

最初に、「ある作曲家がつくった曲を演奏します。」と前時に児童が作曲した楽譜（五線譜に記入されたもの）を配付し、演奏した。～太田おはやし～と記されたプリントには、選ばれた4人の児童の名前と直筆の楽譜を印刷した。選ばれた児童はとても嬉しそうで、周りの友達からも「すごい。〇〇さん。いいなあ。」という声があがった。実際に演奏を皆ですること、自分の曲が皆に共有化されたことが嬉しかったようである。また、演奏する児童も、友達が一生懸命に書いた楽譜を読み、演奏していた。

次に、各自の作品を五線譜にかいた。記譜経験の少ない児童が多く、前時にうまく記譜できなかったので、時間をとり、グループで音符を見ながら演奏した。全音符では書けるが、他の音符になると、棒の向きや記譜する場所が異なる児童が多かった。四分休符も書くのが難しいようだった。しかし、実際にグループで旋律をつなげて演奏すると「グループでつなげたら曲っぽくなって吹きやすかった。」、「自分一人の曲だと変だったが、つなげるとおもしろかった。」「班で発表できて嬉しかった。」「友達の曲がとても吹きやすく、上手にできたと思います。これからもみんなのドレミをリコーダーで吹けるようになりたいです。」などの感想を活動後に書いていた。このことから、児童が、五線譜に対する違和感がなく、それ以上に友達と音楽をつくりあげて楽しむことがわかる。3音に音が限定されているため、階名が書いていなくても演奏できる児童が多かった。感想を述べ合う場面では、国語科で学んだ「話し合いの約束」を生かし、音楽用語を交えた感想や、他のグループと比較した感想、五線譜の有用性に気づいた意見、他の人に演奏してもらえる喜びなどを活発に発表し合っていた。

7 児童の実態調査結果と考察

(1) 児童の実態調査時期

第1回目を平成24年7月、第2回目を短冊の用紙にドレミで作曲、演奏した本時の学習直後（平成24年11月）、第3回目を五線譜に記入し皆で演奏した追加の授業後に行った。

(2) 調査方法

記述式テスト形式プリントを全ての調査で実施（ア）、アンケートは1回目と3回目（イ）、感想を記述する付箋は2回目（ウ）、学習プリントは3回目（エ）で行い、検証

に生かすことにした。

(3) 調査の結果(資料9)と考察

① 検証ア・イ(資料7)について

授業の実践時の発言内容や感想(調査方法ウ)の記述(別添資料)には「思ったより簡単にできた。」という感想が多かった。「簡単すぎる」という感想もあったが、拍子をとりながら全員が真剣に旋律づくりができたのは、前時までに常時活動で「読譜の種」を取り入れた活動を取り入れていたからだと考えられる。また、「リズムが決まっていて簡単だった。」という感想も多かった。答えが一つではなく自由な旋律づくりのようだが、音やリズムの限定がされていたので、児童は自信をもって旋律づくりができたのである。また、今回の旋律づくりに必要なことは、前時までの常時活動で教えているので、スムーズに活動に入れたと考える。感想の中にも「もっと難しくしたいと思います。」、「今度はもっとすごい曲を作りたい。」、「また曲を作りたい。」といった、今後の「音楽づくり」への意欲につながっている記述がされている。

グループで旋律をつなげて演奏したことに関する感想には、「楽しかった。」「わくわく」、「良くできた。」などの、楽しんでグループで活動した様子がわかる記述が多い。

また、自分一人だけで表現するのではなく、ペアやグループ、全体で、「旋律をつなぐ」「お互いを認める」などの活動を行ったので、「順番を変えたら」とか「いろいろ組み立てて」、「合わせると」、「組み合わせると」などの記述がされている。個人からペア、グループへと人数を増やし、小節数を増やしていったことで、表現の幅が広がると共に、表現する意欲が高まっている様子が伺える。また、いろいろなパターンで旋律を組み合わせ、自分たちの音楽をより良い作品になるように試行錯誤している様子がわかる。グループでつくった曲を発表したり、他のグループの作品と交換し演奏し合ったりすることで、曲に耳を傾けて聴き、感想を述べる児童もいた。自分の班の作品と比較したり、終わった感じがする曲かなど、自分が「音楽づくり」を体験しているので、以前よりもしっかりと他の曲を聴くことができていた。また、楽譜で記された他のグループの作品を再現することにより、楽譜と向き合う機会が増えた。

② 検証ウについて(資料9)

先に述べた活動によって、読譜力が高まったか、活動の前後で調査を実施した。内容は、資料7の内容を行った。視唱力については5分間で実施した。

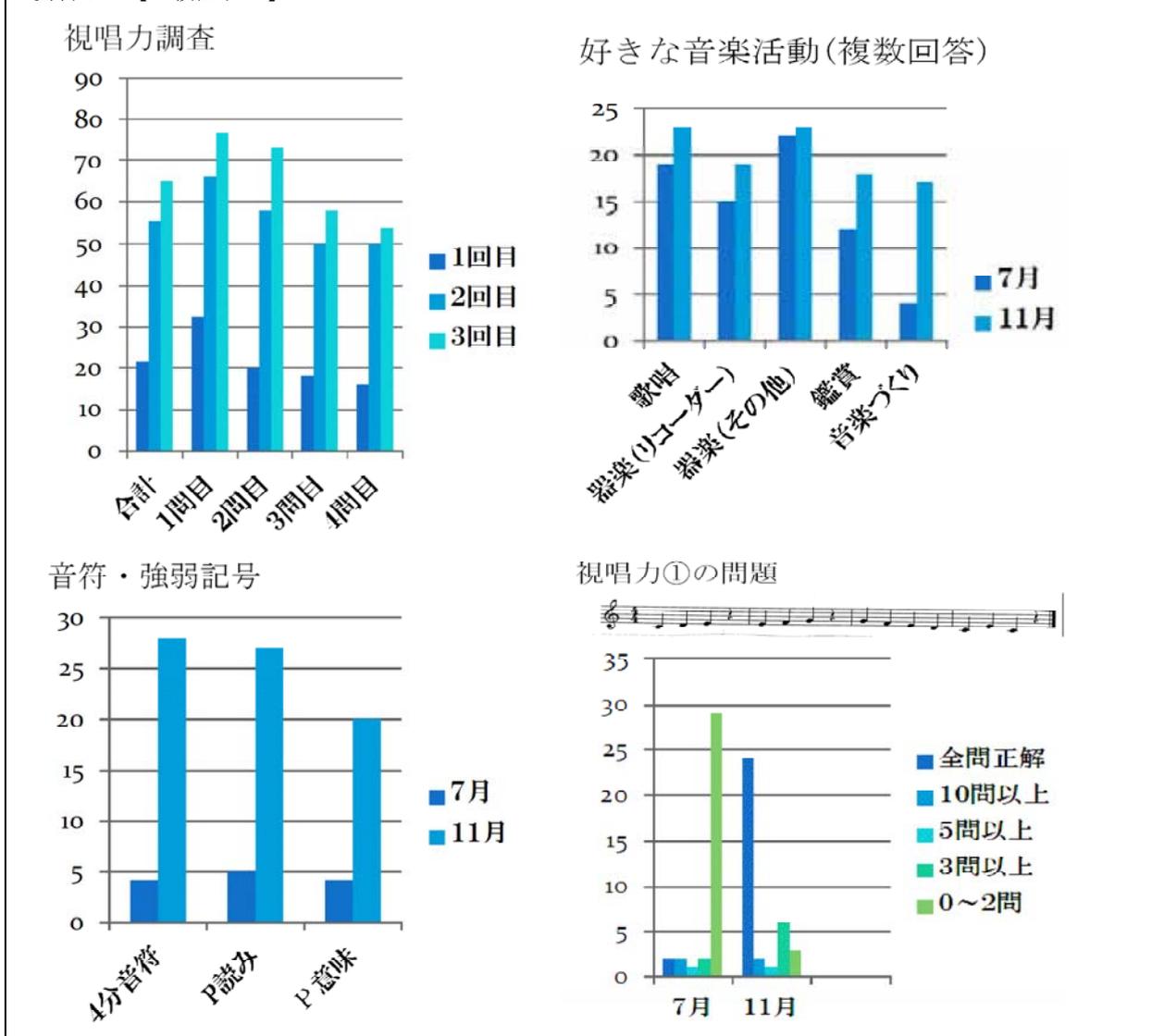
7月の1回目の調査では、合計正答率が21.6%であったのにも関わらず、11月の授業実践後(2回目)は55.4%、五線譜を用いて皆で演奏した授業実践後(3回目)は65%と、正答率が上昇した。2回目から3回目に正答率が上昇したのは、導入に「お味噌汁の歌」や前時に作曲した旋律を「太田おはやし」として取り入れたこと、そして何より、グループで旋律を交換し合って階名で歌ったりリコーダーで演奏したりしたため、5分間で解答できる問題数が増え、正答率があがったと考えられる。

また、好きな音楽活動に関する質問には、「音楽づくり」が好きであるという児童が、4人から17人と増えた。これは、今回の「お雛子づくり」の実践の成果であると考えられる。

音符・強弱記号に関する調査では、「からだで音符」や「音楽づくり」の活動の成果があり、正答数が増えた。

視唱力も、全問正解の人数が、7月と11月に調査すると、2人(5%)から24人(67%)と、飛躍的に上昇している。しかし、この問いは、楽譜に階名を記入する問題なので、リズムや音程の確認には至っていない。よって、資料2で示した某附属中学校1年入学者の視唱力10%を超えたという実態とは確定できない。しかしながら、以前よりも五線譜に慣れ親しんで、読譜できるようになった事は確かである。

資料9 【 検証ウ 】



8 研究の成果と今後の課題

本研究は、これまで取り組んできた自分の読譜指導が、子どもの中で確かなものになっていないのではないか、という反省のもとに取り組んだものである。「学習論」にもとづいた読譜力を身につけるための記憶や読譜指導の段階などを知り、学習指導要領に記述されている内容を再認識した上で授業実践を行ったところ、以下の成果と課題を得たといえる。

(1) 研究の成果

- ① 「読譜」のうち、「読譜の種(リズム・五線譜・拍子)」に関わる活動を長期的計画のもと取り入れることにより、各自が自信をもって「音楽づくり」に取り組むことがで

きた。

- ② 「音やリズムの限定」をしたお囃子の旋律づくりを指導計画の最後に設定し、ペアやグループでの音を介した話合い活動や練り上げを行うことにより、今後の「音楽づくり」への意欲につながった。
- ③ 本研究により、五線譜に慣れ、以前より読譜力が高まった。また、「音楽づくり」の活動を通して、リコーダーの技能も向上した。

(2) 今後の課題

- ① 作品の発表の場の設定と共有化をしたい。

本時につくった旋律を次年度の児童に演奏してもらおう試みもしてみたい。11月末に行われた「秋の集い」の学年発表で、今回の作品を全校児童の前で発表することができ、充実感を得ることができたが、一年経って、前年度つくった作品に、新三年生が旋律をつなげるのも楽しいのではないか。

- ② 読譜の種に関わる活動案を増やし、今後も見通しをもって取り入れる必要がある。

拍子に関しては、四拍子に乗って歌った、絵本「おやおやおやさい」のような曲を、二拍子や三拍子でもつくり、多様な拍子感を体得させる必要がある。

記譜に関しては、様々な機会に体験させていかないとしっかりと身につけていけない。資料10に記した方法を実践し、今後の学習で記譜をする際にリズムや五線譜でつまずかずに、スムーズに活動ができるようにしていきたい。

資料10

【記譜を身につけるために】

五線譜に音符(楕円と棒)を並べたリズム遊び→ペアでつくるリズム(2小節)
→グループで(4人グループの場合、4小節になる。)

- ①つくったリズム絵譜
- ②五線譜
- ③リズム絵譜を並べる。
- ④絵譜の上に楕円を置く。



- ⑤棒や休符を置く。
- ⑥リズム譜の完成
- ⑦棒の置き方
- ⑧正しい棒の置き方



しかし、小学校音楽科の授業時間数は年間50から70時間である。週あたりにすると低学年で2時間、中学年で1.7時間、高学年では1.4時間である。このように少ない時数のなかで、「音楽づくり」を行うには、それまでの音楽活動がどれだけ児童に身につけているかが問われる。また、その「音楽づくり」の活動が、次の活動につながる力とならなければならない。

教師自身が真剣に、子どもたちに「読譜力」を身につけることに向き合い、日々の授業に取り組まなければ、「活動あって学びなし。」という状況に陥るのではないかと感じた。この実践の反省をもとに今後も音の面白さ、特徴に気づかせると共に、「読譜の芽」「読譜の花」である、「楽譜から音を読み取り歌ったり楽器で弾いたりして旋律に組み立てていく力」、「友達のつくった旋律につなげて音楽にしていける力」、「リズム→歌詞→旋律のようにだんだん音楽に組み立てていく力」を、発達段階や、楽曲の楽曲の特徴に応じて、意図的に仕掛けていきたい。

なお、本研究を一般化し、誰もが段階的に実施できるような方法論を確立するのも、今後の課題である。

【引用・参考文献】

- | | | |
|--------------|------|--|
| ・杉江淑子 | 2007 | 『教科「音楽」の授業内容と学力に関する調査』科学研究費補助金研究「音楽科における教育内容の縮減と学力低下の様相」教師調査班調査報告書 |
| ・文部科学省 | 2008 | 『小学校学習指導要領解説 音楽編』 |
| ・吉富功修 三村真弓 | 2008 | 「小学校音楽科の学力に関する研究①」『広島大学研究紀要』 |
| ・吉富功修 | 2010 | 『小学校音楽科教育法』学力の構築をめざして ふくろう出版 |
| ・市川伸一 | 2008 | 『「教えて考えさせる授業」を創る』株式会社図書文化社 |
| ・坪能由紀子 | 1995 | 『音楽づくりのアイディア』音楽之友社 |
| ・山田潤次 | 2001 | 『音楽科 重要用語 300 の基礎知識』 |
| ・畑中浩美 | 2009 | 「読譜指導は必要か」『音楽教育実践ジャーナル vol.7』日本音楽教育学会 |
| ・西林克彦 | 1994 | 『間違いだらけの学習論 なぜ勉強が身につかないのか』新曜社 |
| ・中島 寿 | 2011 | 『初等教育資料 9月号』東洋館出版 |
| ・尾見敦子 | 2009 | 『音楽教育実践ジャーナル vol.7』日本音楽教育学会 |
| ・小原光一 | 2008 | 『新学習指導要領 ガイドブック ポイントと事例』教育芸術社 |
| ・中島 寿 | 2005 | 『音楽科活動バンク』初等教育研究会 |
| ・小原光一 他 12 名 | 2011 | 『小学生の音楽 6 指導書』教育芸術社 |
| ・石田ちひろ 山村浩二 | 2009 | 『おやおや、おやさい』福音館書店 |
| ・藤田浩子 | 2011 | 『あそべやまんば 藤田浩子のお手玉 第3集』むかしあそびの会 |